

## 第2章 銃後

# 戦争中の生活と食体験

疎開生活① 「東京から長野県へ」

高田明美さんのお話から

私の戦争の記憶というところ、小学校に入学する前、五歳頃からのものになります。まず、甘いもの、お菓子が少なくなっていました。近くのパン屋さんからパンを焼く甘いにおいがする日としない日がありました。やがて、おいのしない日がだんだん多くなってきました。パンを焼くにおいがする日は、みんな並ぶようになったのですが、数に限りがあるので、いくら並んでも買える日と買えない日がありました。パン屋さんもパンを作りたいけれど、材料が手に入りません。だから、食べられない日がたくさんありました。「欲しいがりません。勝つまでは」とか、「ぜいたくは敵だ」というふうに言われて育ってきました。だから、何か欲しいと思っても、「欲しい」と言えないのです。

私が小学生の頃、着る物も「配給」という制度になりました。現物が支給されるのではなく、衣料切符というものが配給されました。しかし、貧乏人は切符があってもお金がなく、洋服を買えません。洋服どころか、食べるものを買うこともできなかったのです。お金持ちは、お金はあっても切符が足りないという状況で、お金持ちは貧乏人から切符を買い、洋服を買って着ました。貧乏人は切符をお金にかえて食べ物を食べるといった状態でした。

東京の小学校での授業は、二年生のときに九九を習ったのが最後でした。あとは毎日のように、職員室の方から鳴るサイレンの音が聞こえたら、すばやく自分の座ったイスを机の上において、防空頭巾をかぶって、目と鼻と耳を押さえ、机の下に潜り込むなどの訓練を行っていました。そうしないと、爆風で目が飛び出たり、耳が聞こえなくなったりすると言われま

○衣料切符 木綿や絹製品は配付された切符とお金の両方がなければ買うことができなかった。

○防空頭巾 空襲などのときに飛来物や落下物から頭部を保護するためにかぶった綿入れの頭巾のこと。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。高田さんの学校のものはただ掘って板を下に敷いただけのものでした。

したので、いつも何分で、何秒でできるか試されていきました。実際に空襲警報が鳴った時は、机の下にもぐらないで、廊下に出て、二列に並んで、先生の後について学校の地下にある防空壕に滑り込みました。

また、校門から自分の家へ全速力で走って帰り、自分の家の玄関をタッチしたら、また全速力で学校に戻ることも行いました。先生は、子ども一人一人が何分かかかるか計っていたのです。早く帰れる子は警戒警報の時には家に帰す。家が遠いとか足が余りはやくない子は帰さないという振り分けをしていたのです。先生方は、授業よりも、命を守る方を優先するため、そういうことばかりしていました。

小学三年生の時、二つ年上の兄とともに東京に母を残し、泣く泣く長野県上田市の郊外、中塩田村というところに疎開しました。そこは、これまで空襲や警戒警報がなかったので授業も行われ、勉強も進んでいました。習ったこともない割り算の試験があつて、全然わかりませんでした。家



衣料切符

イメージ図

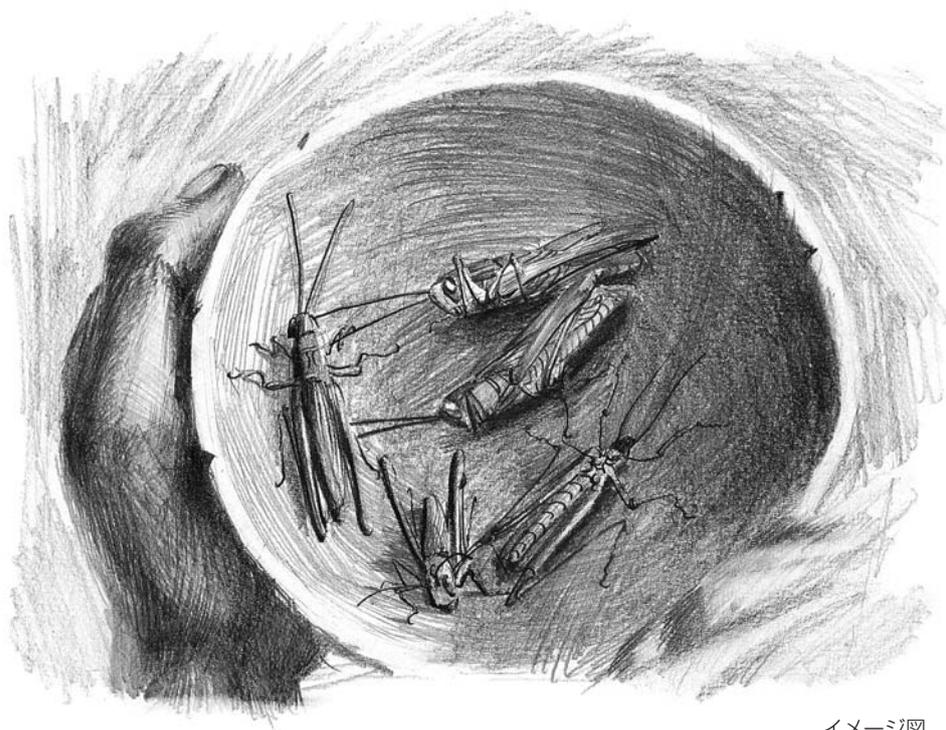
○勤勞奉仕 公共的な目的のためにお金等をもらわずに働くこと。

○イナゴ バッタ科の昆虫。タンパク源 当時はイナゴだけでなく、コオロギやカマキリもとっていたようである。

に帰ってから、兄に教えてもらったりしていましたが、だんだん戦況が悪化していつて、授業ができなくなりました。

空襲や警戒警報が鳴るわけではないのですが、男の人たちが徴兵されてしまい、農業を続けるのに人手が足りなくなつたのです。それで、三年生以上は勤勞奉仕のため勉強はせず、一年じゅう畑仕事をしました。そのときは食べる物も着る物もなく、本当につらい毎日でした。

今思い出しても、よくあれだけ我慢できたなどと思うほどの我慢をしました。本当におなかですいて、雑草でも何でも毒にならないものなら何でも食べました。白いご飯は年に一度食べることができるかどうか。学校ではお弁当を持っていかなければなりませんでしたが、ぞうすいしかなかつたので、アルミのお弁当箱から汁がこぼれないように水平に持っていかなければなりません。夏になると、イナゴを布の袋いっぱいにとりました。とったイナゴはつくただ煮にして、貴重なタンパク源となるのですが、都会の子どもにとってそれは食べ物とは言えず、私は食べることができませんでした。



イメージ図

イナゴ

○タニシ 淡水産の巻貝。

○がま 沼や池の浅いところにはえるガマ科の多年草。

そんなふうにごろごしていているうち、戦争が終わる年の三月、大空襲で家を焼かれた母と兄が疎開先に来て一緒になりました。家がなくなったのですから大変なことです。しかし、それでも母に会えるということが、本当にうれしかったです。失うことも多かったです。私にとつて、ようやく命をおびやかされずに、得ることができた平和でした。

家を失ったの疎開ですから、農家で食べ物と交換してもらえるような着物などの財産はありません。水害でダメになった大根、かぼちゃ、さつまいもなどは普通はまず捨てて捨てるしかない、そういう野菜をもらって食べていました。にわたりのえさにしかならない物も食べました。いつも空腹で、食べられる物を探して歩いていました。かぼちゃの種、柿の皮の干したものの、タニシ、がまの穂の茎などをとりました。学校に通う時は、いつも桑畑を通して桑の実を食べ、空腹をまぎらわせていました。

戦争が終わっても東京にすぐには帰ることができず、六年生の時にいったん埼玉県の浦和に移りました。当時の学校教育は統一されていないなかったので、長野県の疎開先とは教科書も違い、習っていることも全く違うので、勉強でも苦労しました。

私が物心ついたときには、世のなか戦争一色で、本当なら楽しく過ごせたはずの子ども時代がありません。私は、のびのびと自由を楽しんでいる若い人たちに、私たちのような青春を過ごさせたくないといふ心から思います。私たちは戦争にほんろうされた世代です。戦争で失った時間を、今後、誰にも経験してほしくありません。

DATA

平成20年度厚別区平和事業  
聴き取り  
・平成20年8月2日  
厚別南児童会館  
・平成20年11月18日  
大谷地東小学校



高田明美(たかだ・あけみ)さん

・昭和10年(1935年)生まれ  
・札幌市厚別区在住